

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：32665

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25780329

研究課題名(和文)女性の依存問題をめぐる言説と介入/支援の展開からみる 回復 と ジェンダー

研究課題名(英文)Recovery and gender about recovery from addictions

## 研究代表者

中村 英代(NAKAMURA, Hideyo)

日本大学・文理学部・准教授

研究者番号：50635191

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：依存症/アディクションとは、ある行動をやめたくてもやめられなくなる状態のことであり、物質への依存(アルコールや薬物)、行動への依存(ギャンブル)等がある。これらは主に医療の対象とされ、治療のための研究・実践が積み重ねられてきた。社会を視野に収めた依存問題の研究は看過されがちであるが、依存問題の諸相は時代とともに変化しており社会環境との関係は強い。現状の丹念な調査・研究、依存問題が生み出される社会的背景の解明、予防・支援に寄与しうる研究への社会的要請は高い。こうした背景から、摂食障害と薬物依存を中心とし、依存問題をとりまく社会環境を考察した。

研究成果の概要(英文)：In this study, we considered addictions from sociological perspectives. Firstly, we aimed narratives about recovery from addictions in this society. Secondly, we considered 12-step groups through a survey at DARC (Drug Addict Rehabilitation Centers), which are self-help institutions of drug addicts.

研究分野：社会学

キーワード：依存症 回復 摂食障害 薬物依存 ダルク

### 1. 研究開始当初の背景

依存症/アディクションとは、ある行動をやめたくてもやめられなくなる状態のことであり、物質への依存(アルコールや薬物)、行動への依存(ギャンブル)等がある。これらは主に医療の対象とされ、治療のための研究・実践が積み重ねられてきた。これに対して、社会を視野に収めた依存問題の研究は看過されがちであるが、依存問題の諸相は時代とともに変化しており社会環境との関係は強い。現状の丹念な調査・研究、依存問題が生み出される社会的背景の解明、予防・支援に寄与しうる研究への社会的要請は高い。こうした背景から、摂食障害と薬物依存を中心とし、依存問題をとりまく社会環境を考察に着手した。

### 2. 研究の目的

本研究では、依存問題をめぐる社会環境を明らかにすることを目的とし、そのために3つの課題に取り組み、次の成果を得た。

第1に、依存症への回復支援や治療方法が有する回復観を明らかにし、それらを社会システムとの関係でとらえ直した。

第2に、依存問題の語られ方を考察することで、この社会のなかでの依存問題の理解のされかたを明らかにした。

第3に、依存症からの回復支援の共同体として世界的に普及している12ステップ・グループは、単なる依存症からの回復のための共同体ではなく、現代資本主義社会の原理とは異なる原理に基づいた、独自の組織であることを明らかにした。

当初は、特に女性に焦点を当てて女性の依存問題を考察する予定であったが、調査を進めるなかで、まずは、広く依存症をめぐる社会環境全般の考察を優先した。しかし、女性の依存問題と男性の依存問題にはジェンダー構造が関与しており、両者には違いがあり、これについては今後の課題としたい。

### 3. 研究の方法

各研究課題に応じて、文献研究、依存症からの回復支援施設(DARC: Drag Addiction Rehabilitation Center)での参与観察、ダルクの入寮者・スタッフへのインタビュー調査を行った。ダルクについては、主に、Xダルク、Yダルクの二か所を中心にフィールドワークを行った。

### 4. 研究成果

依存症からの回復に関して、当事者たちもセルフヘルプ・グループを作りサポート活動を展開してきたが、専門家主導の治療も当事者主導の支援も、それぞれ独自の「ストーリー」を有している。人々に困難として経験されている事象を特定の形で問題化したり、そこからの回復を特定の方向に水路づけていく言説・実践を総称してストーリーと呼びたいが、摂食障害や薬物依存をめぐるストーリ

ーは問題の性質、回復の方向性、回復後の生き方や人々の自己イメージ等を規定していた。個々人は、病気カテゴリーを引き受けたり、望ましい自己を目指して自己統治する際に、さまざまなストーリーを参照していた。

そして、大きく分けた場合、依存問題の領域には、回復の方向性が二つあることがわかった。それは、今の社会への適応を目標にするもの(認知行動療法など)と、今の社会システムそのものが依存を生んでいるとして、現行の社会への適応を目指さないもの(12ステップ・プログラムなど)の二つである。回復をめぐる、いわば全く逆の方向性が示されているのだ。そして、どちらの回復を目指すかによって、支援の仕方も、支援の受け方も、回復の方向性も、回復後の生活の送り方も、社会との関わり方も大きく変わる[主として雑誌論文・ ]。

さらに、それぞれの回復モデルの根底には、現在の社会システムを肯定するか否定するかという、社会に対する価値規範が組み込まれていることを明らかにした。つまり、依存からの回復のストーリーは、個人の問題の解決の水準に留まらず、どのような社会を志向するかについてのストーリーでもあった。そして、依存症からの回復のための共同体である12ステップ・グループは、現代社会の価値観とは異なる価値観に根差した独自の組織であることを明らかにした[主として雑誌論文 ]。ここからは、現代の資本主義社会でよしとされる価値観が依存問題を生んでいる側面が推察できた。今後は、本研究から現代社会論へと考察を展開していきたい。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

中村英代、「就労困難な学生を大学でどのように支援するか—2名の事例から考える教育現場における質的調査の意義」社会学論叢 査読無、第187号、2017、43-56.

中村英代、「『ひとつの変数の最大化』を抑制する共同体としてのダルク—薬物依存からの回復支援施設の社会学的考察」、社会学評論、査読有、66(1)、2016、498-515.

中村英代、「回復の語られ方—摂食障害にみる『治療』『癒し』『肯定』『解消』のナラティブ」社会学論叢、査読無、第182号、2015、79-93.

中村英代、「誰も責めないスタンスに立ちつつ、問題の所在を探りあてる—摂食障害・薬物依存へのナラティブ・アプローチ」ナラティブとケア—特集 ナラティブの臨床心理学、査読無、第6号、2015、34-40.

Nakamura Hideyo, "2012 JSS Award Winner: Book Division 'Recovery' from Eating Disorders: Narrative-Based Clinical Sociology" *International Journal of Japanese Sociology*, 査読無 23, 2014, 140-156 .

〔学会発表〕(計2件)

中村英代, 「社会学における依存症(アディクション)研究の現状と課題」2014年度日本大学社会学会、2014年7月12日、日本大学文学部(東京都・世田谷区)。

中村英代, 「ダルクにおける『回復』の社会的検討 (6) パネルインタビューからみる入寮者の変容」第86回日本社会学会大会、2013年10月12日、慶応義塾大学三田キャンパス(東京都・港区)。

〔図書〕(計2件)

中村英代, 新曜社, 『社会学ドリル この理不尽な世界の片隅で』, 2017, 193.

ダルク研究会編, 知玄舎, 『ダルクの日々 薬物依存者の生活と人生(ライフ)』, 2014, 382 .

分担執筆 中村英代 :

第4章「就職・退寮・入院」Dさん(男性/30代前半/覚せい剤) (P133-159)、

第8章「ミーティングで話せない」Hさん(男性/40代前半/咳止め薬・鎮静剤・ガンブル) (P247-271)、

第9章「クスリをやめる気はなかった」Iさん(男性/20代後半/覚せい剤・睡眠薬) (P272-299)、

第10章「入寮3日目からずっとクリーン」Jさん(男性/30代後半/咳止め薬) (P302-314)

〔その他〕

・ホームページ等

中村英代オフィシャル・ウェブサイト

<http://www.hideyonakamura.com>

・エッセイ・書評

中村英代, 2016

「ライフストーリー研究はどのような展開をみせているか 書評『ライフストーリー研究に何が出来るか』」2016, 『日本オーラルヒストリー研究』12号: 255-258 .

中村英代, 「ニヤリとした猿から人生を取り戻す 依存症と十二ステップ・プログラム」『世界思想 特集 欲望について』42号: p.34-37, 世界思想社, 2015 .

・アウトリーチ活動・講演

中村英代, 保谷駅前公民館主催・若者の生き方を考える講座 「第4回『やめられない』

依存や嗜癖とどうつきあっていくか?」西東京市保谷駅前公民館、2016年11月 .

中村英代, 保谷駅前公民館主催・若者の生き方を考える講座 「第2回『自信』が持てない 誰もが自信を持ってない社会を生きていくには?」西東京市保谷駅前公民館、2016年11月 .

中村英代, 保谷駅前公民館主催・若者の生き方を考える講座 「第1回『生きづらさ』を語り合うには ナラティブと当事者研究」西東京市保谷駅前公民館、2016年11月 .

中村英代, 薬物依存症を考える家族の会・ピリブ第3回フォーラム「生きづらさ 語ることの大切さ」, 静岡県もくせい会館、2016年10月 .

中村英代, 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター「摂食障害からの回復 臨床社会学の観点から」, 明治大学駿河台キャンパス・リバティタワー、2016年5月 .

中村英代, 静岡市こころの健康センターこころの健康づくり事業「私を語る 社会が変わる アディクションの問題から地域に“語る場”があることを考える」, 静岡市こころの健康センター、2016年3月 .

中村英代, 第19回日本摂食障害学会学術集会・教育講演「ナラティブ・セラピーによる摂食障害の治療・回復の実際 臨床社会学の観点から」, パピヨン 24(福岡) 2015年10月 .

中村英代, 『親と子のメンタルヘルス相談事業』研修会「基本から理解する摂食障害 過食・嘔吐・拒食をする心の理解とかかわり方を学ぶ」, 小平市健康センター、2015年3月 .

中村英代, 摂食障害家族の会ポコ・ア・ポコ「摂食障害 回復の語り」, 千葉市若葉健康福祉センター、2014年10月 .

中村英代, 第55回日本心身医学会総会ならびに学術講演会市民公開講座「わが国の摂食障害医療への期待 摂食障害センター構想へ望むこと」, 幕張メッセ国際会議場、2014年6月 .

中村英代, 青葉の森こころの相談室5周年記念講演「人々は摂食障害からどのように回復しているのか 『回復』を妨げる支援、『回復』を促す支援について考える」, 千葉市文化センター、2013年11月 .

中村英代, 第17回日本摂食障害学会 学術

集会・シンポジウム、「臨床社会学からみた  
摂食障害の回復」、神戸市産業振興センター、  
2013年11月。

中村英代、摂食障害センター設立に向けた  
第2回講演会「当事者の立場から 摂食障害  
治療はどう進むべきか」、神戸市産業振興セ  
ンター、2013年11月。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中村 英代 (NAKAMURA, Hideyo)

日本大学・文理学部・准教授

研究者番号：50635191